

退職にあたって

根橋 正一

1983年以来武蔵野短期大学に10年間、93年に流通経済大学社会学部に赴任して28年計38年間の教員生活に幕を閉じる時が来ました。非力な研究者として悪戦苦闘してきたばかりで成果もわずかばかりの研究生生活についての思い出話をお許してください。大学、大学院生活は道草ばかりで無駄な時間ばかり過ぎていった感があります。計画的に無駄なくきちんと業績を積み上げていくような勤勉な学生でなかったことは、履歴を見れば一目瞭然です。

中国研究を志したのは東洋大学の大学院入学後でした。1966年から始まった中国のプロレタリア文化大革命とは何か、どうなるのか、中国社会主義はどうなっていくのか、というのが私の問題意識でありました。初めて中国を自分の目で見たのは、1976年秋でした。この年は大変な年でした。周恩来が逝去し、(第1次)天安門事件と呼ばれる事件が発生しました。朱徳も亡くなりました。極めつけは9月9日毛沢東が亡くなり、新聞は「巨星、墜つ」と最大の活字で報じました。それから1か月ほど後に私は、訪中団の一員として北京に到着し、済南・南京を経て上海に着きました。上海では少年宮などお約束の見物コースが準備されていましたが、2日目に人民公園のあたりで私たちのミニバスは人の波に巻き込まれ身動きできなくなりました。人々は手に手に、馬天水批判の手作り小旗を振って、楽しげにピクニックのような笑顔で大行進をしていました。馬天水は上海市長で文革派とみられていた人物で、この日の彼を批判するデモは上海の文革派が崩れ落ちたことを示していたのでした。私の文革研究は、ポスト文革研究すなわち文革収拾研究になっていきました。

社会学者にとって現地調査は必要条件ですが、私が現地調査に上海に入ったのは短大の教員になって5年目の1988年のことでした。70年代の中国は「社会学はブルジョア学問である」としてその研究を禁止していましたので、社会学部のある大学もなく、社会学を専門とする研究者も存在していませんでした。社会学に対する見直しが始めるのは80年ごろのことでした。その頃から1949年新中国成立以前に社会学や人類学を研究して

いた老学者たちを中心にして社会学再建の運動が始まったのでした。そうした動きに呼応するように、日本の社会学者たちも中国の社会学復興支援を期して訪中団を出したり、日中学術交流を始めたりしました。福武直先生を中心として日中社会学会が成立すると私は幹事として学会の仕事に携わりました。この学会活動を通して毎年のように中国訪問や中国の研究者との学术交流を経験し、中国の事情に接していました。そんな交流の中で、上海社会科学院社会学研究所特聘教授薛素珍先生が上海調査の機会を与えてくれました。4つの大学の中国研究を志す大学院生4人を誘ってチームを作り上海調査を始めることになり、他のメンバーが上海郊外の農村に入るなか、私は上海市内を歩き回り、聞き取り調査を始めました。中国に入った最初の日本人による社会学調査だったと思います。88年夏以降毎年、春休みと夏休みに上海を訪れて調査を重ねました。そうした経験の上に、当時日中社会学会会長であった青井和夫先生を研究代表者として科学研究費国際学術調査「中国都市・農村の社会変動に関する実証的研究」を申請し研究費を受けることができました。この調査は、都市班と農村班に分かれていましたが、私は都市班のメンバーで青井先生らと上海調査を続けました。3年間の科研調査が終了して成果を刊行するころには、私は流通経済大学に移っていましたので青井先生のそばでその編集作業を手伝うことになりました。青井先生がすべてを仕切っていたのですが、研究成果を完成させるまでの先生の仕事ぶりは情熱的で圧倒される思いでした。本学に来た93年にはもう一つの科研「学生の国際交流とアジア青年文化の比較研究」に参加しました。10万人留学生受け入れ政策を背景として各国の学生文化を研究することを目的としたこの調査は、日本・中国・韓国・台湾・タイの学生文化を比較研究するというものでした。私は中国と台湾調査を分担するとともに、本学に留学している学生に対する調査に「社会調査実習」科目で学生たちと取り組みました。

こうした調査を通して収集されたデータを用いて博士論文『上海の開放性と公共性に関する社会学的研究』を提出したのは1996年でした。大学院を単位取得退学してから13年、上海調査を始めてから9年、本学着任して3年が経過していました。これで博士（社会学）をいただいたのは翌年でした。論文を筑波大学に提出して、口頭試問を受けて97年4月から訪問研究員として1年間カリフォルニア大学バークレー校の中国研究センターに遊学させていただきました。

アメリカには膨大な英文の中国研究文献がありました。現在ではPCの前に座っていれば世界中の研究成果が目の前にやってくるのですが、当時は大学図書館や国会図書館、アメリカンセンター、ブリティッシュカウンシルなどへも出かけて雑誌や文献をあさっていたものです。洋書は高額で図書館に入れてもらったり指導教授に買ってもらうたりしました。バークレーのいくつもの書店には見たこともない本がたくさんあったのです。英語の世界はすごいと改めて感じたものです。

このあたりで中国研究に一段落付けたい気持ちになり、ツーリズム研究や障害者旅行

の研究や社会学理論の涉獵に手を付けていきました。中国への問題意識の中心であった中国型社会主義とか文革とかは、改革開放や天安門事件などを経て色褪せてしまったように思えました。1989年の六四天安門事件の翌日は、日中社会学会の年次大会が早稲田大学でありました。その日の福武直先生の苦渋に満ちた挨拶を忘れることができません。世界の人々が人類の未来を期待した中国革命や文革は、無残にも経済主義、拝金主義、強権主義に陥ってしまったのです。なぜそうってしまったのか、実は最初から人類みんなが毛沢東に騙されていたのか、こうした問題が次の研究課題となり、それまで触れてこなかった文献を読むようになっていきました。M・フーコー、H・ルフェーブ、A・ネグリ、G・アガンベン等の権力論です。こうした研究の視点から中国社会を再考する課題が私にはまだ残っています。

ツーリズム研究は楽しく続けてきました。私は、国際観光学科の「東アジア」を担当でしたが、のちに科目「障害者旅行論」を立てていただき担当しました。また社会学部発足当時から開講されていた科目「民族問題」を「国際社会学」と改名して担当させていただき、さらに「アジア社会論」を開講していただきました。これらの科目の内容をツーリズムとのかかわりから研究してきました。

「障害者旅行論」は、障害を持つ方を中国旅行に誘ったり、アメリカ旅行に連れて行ったりした経験から発した科目でしたが、多くの学生に関心を持ってもらうことができ、ゼミの研究テーマにすることもできました。その中から大学院に進んでこの研究を続ける学生が出てきました。井上寛さんは論文『障害者旅行の段階的発展に関する社会学的研究』を書いて博士（社会学）を取得し、秋田のノースアジア大学の教員になっていきました。その後論文は『障害者旅行の段階的発展』として流大出版会から刊行されました。科研費研究の「障害者にとっての旅行の意味に関する社会学的研究」を行うことができたのも、時代が要求している研究であったからだと感じています。

「国際社会学」では、従属論やワールドシステム論をベースにしてグローバルなツーリズムの研究を行ってきました。「グローバル化時代のアジア諸地域における観光文化に関する包括的研究」で科研の研究費を得て、中国、韓国、台湾、ベトナム、スリランカをフィールドとして、本学内の研究者とともに現地調査を行ったり、研究会を行ったりするとともに、各国の研究者や関係者とも交流を行いました。この研究プロジェクトの最終段階では、ベトナムやスリランカの研究者を招聘し本学新松戸キャンパスでシンポジウムを開くことができました。現地研究のほかに理論研究にも関心は膨らんできました。ワールドシステム論に加えて、A・ネグリの帝国論、H・ルフェーブの空間論、J・アリーの移動の社会学、G・リッツアの消費手段論などがグローバルなツーリズム研究の分野の面白い議論になっていくことを感じて楽しんでいきます。

中国研究についてもツーリズム研究に関しても道半ばです。残された時間の宿題と思っただけで忘れずやっつけていこうと思っています。新しい生活を楽しみながら。

社会学部での仕事について話させてください。学部の学術研究委員という役割が何回か回ってきました。その中で学部創立20周年、25周年、そして30周年に当たる時期に学研委員を担当することになりました。それぞれ記念となるような事業を行うことができました。20周年は2008年ですが、それを記念して紀要『社会学部論叢』に特集を組むとともに、社会学部入門書編集委員会を作り、『社会学は面白い！—初めて社会学を学ぶ人へ—』を刊行しました。本学部教員19人が論考を寄せたもので、私は「写真付き、論文付きの本学部教員カタログ」として、1年生の授業やゼミで使わせてもらいました。

25周年は、2014年度に『社会学部論叢』第25巻記念として、第1号に「流通経済大学社会学部論叢 総目次（第1巻～第24巻）」を掲載しました。第2号は、「第25巻記念論文集」として、特集I『『社会学論叢』と科研共同研究』と題して、大西哲先生「障害者教育問題研究会のこと」と拙稿を掲載し、第II部では「福祉と観光の労働社会学」として7本の論文を掲載しました。これが大西先生最後の原稿であったかもしれません。

30周年は、2018年でした。記念叢書の刊行を提案したところ多くの方々の賛同を得て19年から20年にかけて5冊の著書を刊行することができました。第5冊目の後記として書きました拙文を添付させていただきます。

これで私の思い出話を終えさせていただきます。

流通経済大学社会学部創設30周年叢書の刊行について

1988年4月流通経済大学社会学部社会学科が創設され、1993年には国際観光学科がスタートした。以来本学部は、学生と教員に恵まれ発展し、30周年を迎えることになった。この間社会学を中心にして、福祉学や保育学、心理学、観光学といった幅広い領域の研究と教育に力を注いできた。30周年記念事業の一環として叢書刊行の提案は、まず学術研究委員会、学部長の賛同を得た。その後、教授会及び学長・理事長の承認を経て実現へ向けて動き出したのは、2018年度のことであった。叢書への参加を表明したのは5グループで、19年度から順次刊行されることになった。そして、20年の9月5冊の刊行が完了する。

社会学部発足当初から20年3月まで本学で教鞭をとられた関哲行名誉教授の作品は名著として定評のある研究の復刻である。他方本学に赴任して最も日の浅い地理学の福井一喜助教の作品も収めることができた。また、流通経済大学の心理学領域の科目を担当する6名による論文集、および観光学では幸田麻里子准教授らの新しいテーマでの研究を収めることができた。さらに、長期にわたるハンセン病施設の福祉学的、社会学的な実証研究の成果である川崎愛教授の作品も含まれている。これらは社会学部における研究の一端であるが、それぞれユニークな作品であり、多様な顔を持つ本学部の雰囲気を示すものでもある。ここに集積された業績が、さらに今後の研究と教育に資することが

期待される。本叢書刊行は、多くの方々に御尽力いただいて実現したものである。日通学園理事長・流通経済大学学長野尻俊明教授はこの事業に賛同して大きな支援を与えてくれた。学部長として佐藤克繁教授は本事業の実現に各方面に働きかけてくれた。社会学部教授会の理解は不可欠であった。また、この間学術研究委員であった八田正信教授、澤海崇文准教授、高口央教授、福井一喜助教の果たした役割は大きい。計画の段階から親身になってアドバイスと実務を引き受けていただいた大学出版会の小野崎英氏、杉山めぐみ氏の働きなくして、実現することはなかったの言うまでもない。みなさんに感謝申し上げる。

2020年8月

学術研究委員会 社会学部創設30周年叢書担当

根橋 正一